

[論文]

タイ・キリスト教団における神学的訓練を 受けている女性たちのグループ

——「サトリー・サパー」(The Christian Women) の事例¹——

藤原 佐和子

はじめに

キリスト教は全世界の人口の33パーセントに信仰されているが、キリスト者の過半数が非欧米諸国に分布していることを鑑みると、これを今日「欧米の宗教」と呼ぶことは難しい。また、主要教派における礼拝出席者の過半数が女性であることを考慮するならば、今日のキリスト教をめぐる状況を適切に把握しようとする際、非欧米諸国の女性キリスト者の存在は決して無視することができない。曾祖母、祖母、母から信仰を受け継いだ四代目の日本の女性キリスト者である筆者は、特にアジアの女性キリスト者、なかでも「神学的訓練を受けている女性たち (theologically trained women)」を中心に進められてきた1980年代以降の神学運動、「アジアの女性たちの神学 (Asian women's theologies)」に注目してきた。

1960年代の「アジア神学」が、厳密には「男性たちの」(men's)のものであったことや、欧米の読者を想定した「アメリカにおけるアジア神学」であったことは既によく知られているが、「アジアの女性たちの神学」で知られている者たちの大半もまた、「アメリカにおける」という制約から決して自由ではない。この分野の入門書が日本語に翻訳されたのは、2008年のことである²。同年、神学を学び始めた筆者は「アジアにおける」という点を強

¹ この本稿は、日本基督教学会(2015年9月11日、於桜美林大学)における研究発表を加筆・修正したものであり、平成26～27年度科学研究費助成事業(研究活動スタート支援、課題番号26884070)「現代アジアの女性キリスト者の貢献可能性と環境倫理—タイを事例に—」による成果の一部である。調査活動にあたってはパヤップ大学マクギルバリー神学校の協力のもと、タイ国立学術研究会議(National Research Council of Thailand)による正規の許可を受けている。การวิจัยข้ามพรมแดนความรู้ของสตรีคริสเตียนอาเซียนและโอกาสสนับสนุน; กรณีสึกษาทฤษฎีสตรีศาสนศาสตร์สภาคริสตจักรในประเทศไทย

² Chung Hyung Kyung, *Struggle to Be the Sun Again: Introducing Asian Women's Theology*, Orbis Books, 1990. = チョン・ヒョンギョン(山下慶親・三鼓秋子訳)『再び太陽となるために—アジアの女性た

調する方法論にこだわってきた。「増えつつあるとは言え、女性の神学生の数はまだ少なく、アジア人女性で神学の学位を得る者は少ない³」と言われるなかで、神学的訓練を受けている女性たちは、キリスト教共同体の内外に対してどのような働きを引き受けていくことができるのか。筆者はこれまで、いわゆる女性神学者たちを主な研究対象としてきたが、現在では、神学的訓練を受けている女性たちによる働きの多様性そのものを描出することに関心がある。

そこで注目しているのが、人口に占めるキリスト者の割合が日本と類似するタイにおけるプロテスタント最大合同教派、タイ・キリスト教団（Church of Christ in Thailand, 以下「教団」）に、1988年に設立された「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」（タイ語でグルム・サトリー・サーッサナサート）である。本稿では、グループに関する研究の基礎を築くことを目的として、「キリスト者の女性たち」を意味する関連団体「サトリー・クリスティアン」（สตรีคริสเตียน），通称「サトリー・サパー⁴」と、グループのメンバーであり、サトリー・サパーの代表であるスパポーン・ヤーナサーン（Supaporn Yanasan）[1950-]の働きとはどのようなものかを事例とする⁵。

I サトリー・サパーと「教会女性」（church women）

『サトリー・サパーの歴史⁶』、『2015年度第1回会議資料⁷』によれば、その前身は第二次世界大戦前に作られた“King’s Daughter”（คิงสดอเตอจ）というグループである。1946年に再始動すると長期的活動が目指され、1950年にはサトリー・サパー第1回総会が開かれた。翌年には『憲章と規則』が制定され、海外との協力も始まったが、1959年に教団が成立

ちの神学—』日本キリスト教団出版局、2008年。

³ Kwok Pui-lan, *Introducing Asian Feminist Theology*, Sheffield Academic Press, 2000, p. 30. クォクによる「神学的訓練を受けている女性たち」への注目とは対照的に、チョン、前掲書、221頁のように「現実を生き抜こうとする—すべてのアジアの女性たちが神学者なのである」と「神学者」の定義を拡大する見方もある。この点については稿を改める。

⁴ 正式には、タイ語では สตรีคริสเตียนสภาคริสตจักรในประเทศไทย, 英語では The Christian Women of the Church of Christ in Thailand (CCT-CW) と表記される。これを「キリスト者の女性たち」と直訳すると一般名詞との区別が難しくなるため、例えば、日本基督教団が“Kyodan”という原語の略称でも知られていることにならって、便宜上「サトリー・サパー」と呼ぶことにする。

⁵ Kamol Arayaprteep, “Theologically Trained Women in Thailand,” in Association for Theological Education in South East Asia (eds.), *Workshop on Women in Theological Education: November 2-10, 1993*, ATESEA, 1993, pp. 70-72 は、唯一の先行研究である。

⁶ หน่วยงานสตรี สภาคริสตจักรในประเทศไทย, ประวัติสตรีคริสเตียน : สภาคริสตจักรในประเทศไทย, 2014/2015.

⁷ เอกสารการประชุม, คณะกรรมการดำเนินงานสตรีคริสเตียนสภาคริสตจักรฯ, ชุดวาระปี 2010-2014 และ ชุดวาระ ปี 2015-2018, สมัยสามัญ ครั้งที่ 1/2015, วันพฤหัสบดีที่ 22 มกราคม ค.ศ. 2015 ณ ห้องนมัสการ ชั้น3 อาคารสภาคริสตจักรฯ กรุงเทพฯ

したとき、そこに女性たちのための部署が作られることはなかった⁸。

そのため、サトリー・サパーはあくまで任意団体として、教団の外に位置せざるを得なかったが、彼女たちはその関心を「女性のみ」に特化させることなく、教団のあらゆる部門、全国の男性たちと女性たちとの協力、連携をはかっていった。1967年からの10年間、バンコクに教団オフィスを設置するための募金キャンペーンに協力し、その努力は、教団内に「女性部のオフィス」(สำนักงานสตรี)を設置することに結実している⁹。サトリー・サパーが女性部とともに、若い世代のための訓練プログラムを開始したのは1969年のことであり、後継者を育てる努力は現在も継続されている¹⁰。今年8月7日には、創立65周年を記念する集会在チェンマイで開かれ、300名以上の参加があった¹¹。

このように、サトリー・サパーと女性部の関係はやや複雑である。まず、サトリー・サパーは教団主導で組織されたものではなく、女性たちが自主的に形成したネットワークが元となっている。委員9名が無給で奉仕しており、特定のオフィスはなく、教団からの資金援助も受けていないが、全教区のネットワーク(女性会)を維持している。そして、強い連携関係にある教団「女性部」(หน่วยงานสตรี)のオフィスには、教団の予算で雇用された4名の専任職員(チェンマイ、バンコクに各2名)がおり、プログラムの多くを共催で行っている¹²。

そして、教団に女性部がある今、サトリー・サパー不要論がないわけではない。しかし、その責任者カムン・チナウォン¹³(Khammul Chinawong)によれば、女性部が全教区の女性会と連なり、教団内、国内で展開するプログラムについて責任を負っているのに対し、サトリー・サパーはタイ国立女性協議会の加盟団体であったり、国内外のエキュメニカル

⁸ インド、香港のホームレスの自立支援、ラオスの宣教師に対する支援、リストコインの交わりに加盟、海外に留学する女性に対する奨学金、ラオスの学生を育てる活動など。

⁹ バンコク・クリスチャン病院内(当時)、1997年に移転した。

¹⁰ ชาวาโกะ พุฒิวาระ, “พันธกิจสตรีคืออะไร: เรียนจากนักศาสนศาสตร์ที่สังกัดสภาคริสตจักรในประเทศไทย,” โครงการอบรมสตรีรุ่นใหม่: คุณค่าของสตรี, หน่วยงานสตรี สภาคริสตจักรในประเทศไทย, ณ ศูนย์พระคริสตธรรมลีไอ้ม, เชียงใหม่, 15 สิงหาคม 2014. =「女性キリスト者によるミニストリーとは何か—タイ・キリスト教団の女性神学者たちに学ぶ—」。筆者は、教団女性部の招きにより、2014年度の訓練プログラムでプレゼンテーションを行った。また、1971年から1975年にかけては、プラカイ・ノタワシー(Prakai Nontawasee) [1926-2013] が代表を務めたことでも知られている。2000年から2002年にかけて、サトリー・サパー創立50周年を記念した研修施設がチェンマイ県サーラピー郡に建設された。

¹¹ 於タンマプラティープ教会。

¹² サトリー・サパーには会員登録制度がない。したがって、サトリー・サパーの記念写真に写っている大勢の女性たちは19教区の女性会のメンバーたちである。

¹³ 「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」の中心的メンバーの一人であり、教団女性部の責任者。

な交わりにおける窓口としても機能するなど、「対外的」な活動で貢献しているという¹⁴。

例えば、サトリー・サパーは女性に関する事柄について、世界教会協議会（WCC）やアジア・キリスト教協議会（CCA）との連絡窓口になっており、「リーストコイン」（ICFLC）、「世界祈禱日」（WDPIC）や、1958年に始まる「アジア教会婦人会議」（Asian Church Women's Conference, 以下 ACWC）への加盟でも知られている¹⁵。

ACWCは、アメリカ長老派教会によって世界中の女性キリスト者たちが集められた際に、参加者たちの間で構想されたもので、「アジアの姉妹たち」（Asian sisters）とのエキュメニカルな交わりを目的として1958年に組織されたものである¹⁶。したがって、1950年創立のサトリー・サパーは、国内において自発的に起こった運動であるとともに、1950年代半ばに始まったアジアの「教会婦人¹⁷」、ないし「教会女性」（church women）とのエキュメニカルな交わりに加わることによって刺激を受けてきたと見ることができる¹⁸。また、サトリー・サパーの正式名称は「キリスト者の女性たち」であって、ACWCのように「教会女性」を名乗っているわけではないが、これは実質的には、全教区の女性会が束ねられたいわゆる「教会女性」のネットワークであると見てよいだろう。

また、サトリー・サパーが、伝統的な（すなわち母／妻の役割を軸として、男性に対して従属的な）性役割を踏襲していることは、先月の65周年記念集会で唱えられた「サト

¹⁴ http://thaiwomen.or.th/index.php?option=com_content&view=article&id=2&Itemid=2&lang=en, accessed on August 10, 2015. 1956年に設立されている。シリキット王妃の後援による全国規模の団体であるため、サトリー・サパー65周年記念集会上では彼女を讃える儀礼が行われた。国内ではローマ・カトリック、福音派、バプテテスト、セブンスデーアドベンティストの女性団体との交流がある。

¹⁵ サトリー・サパーは1950年に創立し、1956年に「リーストコインの交わり」に加わることから海外との協力を始めているが、リーストコインが同年にインドのシャンティ・ソロモンによって「どんな人にも必ずできる献金の方法」として始められた運動であることを思い起こすとき、サトリー・サパーがアジアの女性キリスト者によるエキュメニカルな働きに対して、きわめて迅速な応答を行っていることが分かる。ACWCの日本語訳は定訳に従った。

¹⁶ <http://acwc.blogspot.com/2008/06/about-acwc.html>, accessed on August 9, 2015.

¹⁷ 「教会婦人」という言葉は、今日ふさわしい訳語とは言えない。広井多鶴子『『婦人』と『女性』—ことばの歴史社会学—』、群馬女子短期大学紀要、25巻、1999年、121-136頁によれば、「婦人」は、明治啓蒙思想の中で「既婚女性」の意味で使われ始めた新しい言葉である。これは女性に公的な敬意を与えるとともに、「女性を家庭や結婚に拘束し、よき妻、よき母たること」を要求するものであった。1930年代になると女性—男性という言葉が創出され、代表的な呼称は「婦人」から「女性」に移る。戦後、経済成長とともに専業主婦が一般化する中で「中流階級の主婦をイメージさせる言葉」として残るが、1970年代以降の女性解放運動において「婦人」は名乗られなかった。

¹⁸ Nantawan Boonprasat-Lewis, "Asian Women Theology: A Historical and Theological Analysis," *East Asia Journal of Theology*, Vol. 4, No.2, 1986, p. 18. 第二世代の神学者ナンタワン・ブーンプラサートルイス（Nantawan Boonprasat-Lewis）は、「教会女性」が、実際には教会において不可欠な出席者と見なされておらず、神学についてもほとんど発言することのない周縁に位置付けられていると考えた。「アジアの女性たちの神学」の登場以前のエキュメニカルなネットワーク（ACWC）は、いわゆる「教会女性」の伝統的なあり方を反映させたものに過ぎなかった。

リー・サパーの65年」という祈りの言葉に、「男性の顔を立てる女性キリスト者¹⁹」(เป็นคริสเตียนเพศหญิงเซ็ดชูชาย) という一節があったことにも明らかである。

これに対して、1988年に設立された「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」は、このような女性理解に対する問題意識に端を発するものと言えそうだ。かつて、「教会女性」という言葉が、「女性キリスト者」の単なる言い換えであったのは、端的に言って、彼女たちにとって神学的訓練を受けるという選択肢が無きに等しかったからである。

それでは、タイにおいてこの新しい女性像はいつ生まれたのだろうか。その手がかりを、グループの創始者である聖書学者ガモン・アラヤプラティープ²⁰ (Kamol Arayaprathep) [1925-2008] の論攷に見てみよう。

II 神学的訓練を受けている女性たちのグループ

アラヤプラティープはまず、「男性も女性も、教育と職業において平等である²¹」との考えを明らかにした上で、神学教育の分野でこれが実現されるまでに、65年もの歳月を要したことを指摘している。

タイ神学校 (Thailand Theological Seminary) が設立されたのは1888年で、当初は男性のみを対象とした神学教育が行われていた。その門戸が女性にも開かれるようになったのは、1953年のことである。その意味で、正にアラヤプラティープは、タイにおける「神学的訓練を受けている女性」の第一世代であり、自ら神学生の指導にも尽力した「女性神学者」の第一世代でもあった。

「アジアの女性たちの神学」には、1980年代に整えられた三つの制度的基盤がある²²。

¹⁹ 富田竹二郎『タイ日大辞典』めこん、1997年によれば、「ほめ上げる」「持ち上げる」という意味もある。このような女性理解を鑑みると、サトリー・サパーで「(聖書からの)女性たちが行うべき10のこと」の一つに挙げられている「心を込めて世話すること：私たちの人生で最も価値あることは、他者に仕えることです」という項目も、まずドメスティックな領域を前提としているように見えてくる。

²⁰ Sawako Fujiwara(ซาวากะ ฟุจิวาระ), “อัตลักษณ์และวาทกรรมทางเทววิทยาของสตรีคริสเตียนในประเทศไทย : กรณีศึกษาสาธุคุณ ดร.กมล อารยะประทีป (Identity and Theological Discourse of Christian Women in Thailand: A Case Study of Kamol Arayaprathep),” *Chiang Mai University Journal of Social Sciences and Humanities*, Chiang Mai University, 2557 (2014), Vol. 26, No. 1, 179-201などを参照。

²¹ Arayaprathep, op. cit., 1993, p. 70. ここでチェンマイ女子学校は「キリスト教による社会貢献の例」と説明されているが、宣教師による女性教育をあくまで「宣教戦略の一環」とする見方もある。Herbert R. Swanson, “A New Generation: Missionary Education and Changes in Women’s Role in Traditional Northern Thai Society,” *Sojourn*, Vol. 3, No. 2, 1988, pp. 187-206.

²² CCA女性担当部(1981年)、EATWOT女性委員会(1983年)、AWRC(1987年)を指す。専門誌 *In God’s Image* の創刊は1982年。1981年にスバブミ(インドネシア)で「神学的訓練を受けたアジアの女性たちの会議」が開かれた。AWRCは、Asian Resource Centre for Culture and Theologyを指す。日本語訳は定訳に従った。

その一つ、アジア女性資料センター（AWRC）の1987年の創立大会（シンガポール）に参加したアラヤプラティープは、その翌年、グループを設立している²³。彼女は、神学校で学ぶ女性たちが、性役割を理由として、男性と比べて二次的な職務を割り振られている状況に対し、強い問題意識を抱いていた。

タイにおいて、女性たちが神学教育や握手礼を受けたり、神学の研究者や教員として活躍するためには、「文化、アパシー、男性の教会指導者たちへの盲目的な支持、偏見、不正義²⁴」といったさまざまな障壁に向き合い、大変な努力を積み重ねていかなければならない。しかし、彼女は、男性たちにも責任を問うのではなく、「多くの場合に、女性たち自身の間の無関心（a lack of interest）²⁵」にも原因のあることを洞察していた。彼女がグループの設立時に趣旨としていたのは、女性たちに自らの可能性を信じさせ、神から与えられたユニークな「賜物」（ของประทาน）を生かしていくことであった。そのためには、神学的訓練を受けることや、握手礼を受けることもまた、女性であることを理由に躊躇されるべきではないと考えられたのである。

このように、グループでは設立当時から「賜物」の重要性が強調されてきた。現在（2015年）の資料にも「奉仕の働きは、神が与えてくださる賜物によってそれぞれ異なるものです。（私たちは）信仰と確信と神ご自身への信頼をもって、与えられた賜物を用いなければなりません²⁶」という言葉が見られる。

資料によれば、「神学的訓練を受けている女性²⁷」とは、① 教団の神学校で学び、さまざまな場所で奉仕している女性と、② 教団以外の神学校で学び、教団において奉仕している女性（厳密には、神学生も含まれる）である。そして、グループの基本姿勢は、「主イエス・キリストに対する信仰を持ち、すべての人にとっての光となるために、聖霊の導きによって、力を合わせてミニストリーを行うこと」にあるとされている。

その目的は、① 教団内外の教会、教育機関、施設において継続的にミニストリーを行うためのポテンシャルの強化と開発、② ミニストリーの行いにおける一致（ความเป็นเอกภาพ）の促進、③ 若い世代の女性たちが、神学の学びに献身することの奨励

²³ Kamol Arayaprathep, "Christology," *Asian Women Doing Theology: Report from Singapore Conference, November 20-29, 1987*, AWRC, 1989, p. 172.

²⁴ Arayaprathep, op. cit., 1993, p. 71.

²⁵ Idem.

²⁶ 傍点は筆者による。

²⁷ 「神学的訓練を受けている」（theologically trained）と言っても、それは専門学校から博士課程のレベルまで幅広い。しかし、「一致」がキーワードの一つとなっているように、問題は女性キリスト者という主体を分類し、細分化していくことにあるのではない。

と支援、④ 国内外における神学的訓練を受けている女性たちのネットワーク（เครือข่าย）の構築である²⁸。

第一世代の教え子に当たる第二世代の神学者、ナンタワン・ブーンプラサート-ルイス（Nantawan Boonprasat-Lewis）による1980年代半ばの論攷を参照すると、このようなグループが必要とされたのは、社会において「女性であること」（womanhood）が再定義されていくとき、教会や神学校において「女性キリスト者であること」もまた再定義されていくためだと考えられる²⁹。女性たちが従来の性役割を超えた複数の役割（multi-role）を担うようになるとき、「教会女性」の枠に留まらない奉仕のあり方を切り開いていこうとする者たちが現れるようになった。

興味深いのは、「女性であること」を理由として、「賜物」を用いる範囲を制限する／されることから女性たちを解放しようとするものであるがゆえに、このグループのメンバーは（教会女性と比較して高学歴と言われているにもかかわらず、アカデミック志向であるよりも）明らかに行動志向（action-oriented）であるという点、そして、牧師（ศส., サッサナーアジャー³⁰）となることを必ずしも最優先事項としていない点である。このグループは、「按手を受けているか否か」によってメンバーを選別することがなく、むしろ、多様な場所で多様な働きを行うことを奨励している。これまでの参与観察では、彼女たちは聖職中心主義に対しては抵抗の姿勢を示し、信徒を重視し、「普通の女性」の振る舞いを好むことが分かってきた³¹。

特に、現代表の実践神学者チュリーパン・スィーソントーン（Chuleepran Srisoontorn）は、信徒を「牧師と同じように神に仕える者（ผู้รับใช้พระเจ้าเช่นเดียวกับศิษยาภิบาล

²⁸ グループのプロジェクト／活動には、① 委員会の会議、② 按手を受けて牧師になったり、病気になったり、死去したりする女性を訪問すること、③ 各教区の教会において、女性たちと共同で働くこと（การประสานงาน）、④ セミナーの開催、⑤ 資金集め、⑥ 7つの教育機関（神学校その他）の女性神学生に対する奨学金、⑦ 広報活動、⑧ メンバー募集、⑨ 新しい世代の神学的訓練を受けている女性たちの訓練プログラムがある。

²⁹ Nantawan Boonprasat-Lewis, "An Overview of the Role of Women in Asia: A Perspective and Challenge to Higher Education," *East Asia Journal of Theology*, Vol. 3, No. 2, 1985, p. 142. ブーンプラサート-ルイスによれば、戦後、急速に変化するアジア社会において、近代化、西洋化、第二波フェミニズムからの影響を受けて、旧来の性役割は女性たちを十全に表象するものではないと感じられるようになっていった。職業訓練を受けてキャリアを持つようになると、自分たちが「複数の役割」を持つことに気付くようになり、従来男性のものとされてきた性質、役割、能力は、「女性であることの新しい定義の一部」になり始める。脚注18も参照。

³⁰ 職制については脚注37を参照。

³¹ 2013年、2014年、2015年の計3回、グループのセミナーに参加した。このような姿勢は、単にリベラルと評価されるだけでは足りない。上座部仏教を背景として「聖職者」や「高学歴者」に対する極めて高い尊敬が示されるタイ社会では、彼女たちが普通の女性として振る舞うことの意義は大きい。

ら³²」,「信徒は牧師を必要としているが,牧師も信徒を必要としている³³」と明言している。これとパラレルであるのが,「教会女性」は「神学的訓練を受けている女性」を必要としており,その逆もまた然りだということだ。

だからこそ,彼女たちの一部が,サトリー・サパーの指導者や女性部の職員として,「教会女性」を導くとともに仕えるという多層的な役割を担っているのであろう。続いてはその例として,サトリー・サパー現代表のヤーナサーンの働きについて見ていくことにしよう³⁴。

III スパポーン・ヤーナサーンの事例

ヤーナサーンは,チェンラーイ出身の三代目のキリスト者で,キリスト教教育者(Christian educator)として知られている。彼女は非常におてんばな子どもであったというが,洗礼を受けたのは生まれ変わるような経験をしたためである。

14歳の時,彼女は意図せずして教会の青年会の委員に選ばれ,牧師によって任命式が行われた。そこでコリント I3: 16-17³⁵に基づく「聖霊はあなたの中にある」という説教を聴き,「私たちが聖霊によって神のために働かないのであったら,私たちは一体何をやるというのですか」という牧師の問いかけに感銘を受ける。

当時チェンラーイには高等学校がなかったため,彼女は「もしもプリンスロイヤルカレッジ(チェンマイのキリスト教主義学校,以下PRC)に行けるのだったら,(私自身を)神様にお献げします」と祈る。彼女の進学は叶い,主席で卒業後,チェンマイ大学で教育学を専攻する。当時,同大学には学生キリスト教運動³⁶(SCM)の事務所があった。彼女は

³² สุสิพรรณ ศรีสุนทร, ชีวิตและการทำพันธกิจของคริสตจักรท้องถิ่นในเขตชนบทภาคเหนือ สังกัดคริสตจักรภาคที่1 แห่งสภาคริสตจักรในประเทศไทย, มหาวิทยาลัยพายัพ, 2555, p. 55. 傍点は筆者による。タイ仏歴2555年は,西暦2012年である。

³³ スィーソントーンは,現在,「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」の代表,サトリー・サパーの副代表であり,2010年から現在に至るまで,筆者のタイにおけるスーパーバイザーである。彼女から繰り返し聴く言葉の一つをここでは示した。

³⁴ 2015年2月5日,タンマプラティープ教会で実施したインタビューを主に使用する。

³⁵ あなたがたは,自分が神の神殿であり,神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。神の神殿を壊す者がいれば,神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。

³⁶ 大貫隆,名取一郎,宮本久雄,百瀬文晃(編)『岩波キリスト教辞典』岩波書店,2002年,205頁によれば,大学における学生と教授を中心にした,主としてプロテスタントのキリスト教運動。1895年スウェーデンで世界学生キリスト教連盟が結成されたときから定着した呼称。その形態は国によって特徴があるが,いずれも大学と教授が主体的に運営を担う。大学共同体内におけるキリスト者の責任を担い,主な活動は聖書研究,礼拝,奉仕活動である。タイでは,アドボカシーと無関係であった。

そこで聖書研究、奉仕活動に参加し、神に仕えるために何をしたらいいのか、どう生きていったらよいかについて考えた。

彼女は大学卒業後、母校 PRC に英語の教師として就職する。以降、キリスト教教育にかかわったこと、37歳の時、教団の研修旅行で初めてミャンマーの教会や神学校を訪問したことをきっかけに、もっと神について知りたいと考え、マクギルバリー神学校（旧タイ神学校）で3年間学ぶ。修士論文「ヨハネ福音書におけるパラクレートスに関する研究³⁷」を書き、1990年、40歳で神学修士の学位を得た。「人の土台に聖霊を」、「聖霊を受け入れるならば、何物も問題ではなくなる」というのが彼女の信仰の特徴である³⁸。

1991年、母教会にて牧師補佐（クルー・サッサナー³⁹）として働き始める。PRCではチャブレン（อนุศาสน์），キリスト教倫理（คริสต์จริยธรรม）の教師として宗教教育活動を指導し、隣接のインターナショナルスクール等の運営にもたずさわった。ヤーナサーンとサトリー・サパーのかかわりは、1987年、教区事務所で女性会の代表を1年間務めたことに始まる。以降、彼女はサトリー・サパーの秘書、副代表、代表を歴任し、バンコクとチェンマイで交互に開かれる月例会議に参加してきた。現在、他県を含む3つの教会でも奉仕している。

このようにヤーナサーンの事例には、人生の半ば（40歳前後）で「教会女性」から「神学的訓練を受けている女性」になったという点に大きな特徴がある。

興味深いのは、彼女は「女性であること」を特別の賜物であると理解し、「神は男性よりも女性に多くを与えた」と明言する一方、その「多く」というのが共感性、感受性といった（いわゆる本来的に女性的であると信ぜられてきた）側面を指すのに過ぎないという点である⁴⁰。

³⁷ สุภาพร ญาญสาร, “การศึกษาความหมายของ “พาราเคลตอส” (องค์พระผู้ช่วย) ในกิตติคุณยอห์น,” วิทยานิพนธ์ซึ่งเป็นส่วนหนึ่งในการทำปริญญาศาสนศาสตร์มหาบัณฑิต, คณะศาสนศาสตร์แม่คึกลารี มหาวิทยาลัยพายัพ, เชียงใหม่, 1989. โยฮาน 14: 16, 26, 15: 26, 16: 7. 修論 (p. 27, 本稿7頁に転写) の図には、① イエスが父に帰る、② 父から人間へと聖霊が雨粒のように降り注ぐ、③ 人間の中と間に聖霊が満ちると平和がもたらされる様子が示されている。(タイの大学では学位授与までに1年待つため、学位授与は1990年。)

³⁸ 聖霊の働きによってもたらされる賜物は、「信仰深さ」「寛容」「自制心」である。「寛容」というのは、第一に神、第二にあなた、第三に私と考える謙虚さを指すという。ヤーナサーンにとって「神学」は、個人的に神と知り合うことであり、「神学する」とは、聖霊を味わい、私たちの中にあるパラクレートスによって人々と分かち合い、力づけ合うことである。

³⁹ ศส. (コーソー, クルーサッサナー) は、按手を受けていないが、教会で働く牧師補佐 (assistant pastor)。「伝道師」と呼んでもよい。聖典礼執行はできない。ただし、教区から特別に任命され、ศจ. がない地方の教会に派遣されて洗礼をさずることなどは可。ศป. ではない。ศจ. (サッサナーアジャー) は按手を受けた牧師 (Rev.) である。ศป. (スイッサヤーピバーン) というのは、教会付きの ศจ. である。「アヌサーソック」は、学校、病院付きチャブレンを指す。「スイッサヤーピバーン」であるかどうかは場合による。教会付きと兼任でなければ、「スイッサヤーピバーン」とは呼ばない。

⁴⁰ スイソントーンを含むグループの中心的メンバーたちから、彼女は保守的なジェンダー理解の

ヤーナサーンにおける「女性であること」の理解は、基本的に、性役割に基づく本質主義的なものであって、構築主義とは根本的に異なると見てよいだろう。しかし、正に「教会女性」と「神学的訓練を受けている女性」の間（in-between）に位置するという点において、「教会女性」たちを中心とするサトリー・サパーの指導者にふさわしい人物とされているのである。

おわりに

「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」は、信徒を中心としたいわゆる「教会女性」のグループ、聖職者を中心とした「女性牧師」のグループ、あるいは研究者を中心としたアカデミックな「女性神学者」のグループのいずれでもないところに最大の特徴がある。彼女たちは、「女性キリスト者」の生き方について、一つの固定的モデルを提示することなく、それぞれ異なる賜物を生かすことを奨励している。関連団体サトリー・サパーとその代表ヤーナサーンを事例とした調査においても、恐れることなく賜物を用い、育て、それによってさまざまな働きを行うことに対する信仰的な確信と、継続的な実践を観察することができた。

筆者はこれまで、グループのメンバーとの交流を通して、働きの多様性は、私たちの「間」にあるばかりではなく、多層的な役割を引き受ける私たちの「内」にもあることに気付かされてきた。それに加え、ヤーナサーンの事例から受け取ることのできる希望は、一人の女性キリスト者の人生にもさまざまな段階があり、それに応じてさまざまな働きがあるということだ。彼女によれば、神が私たちが働かせて下さるのであって、私たちが人生の歩みを振り返るとき、そこにははっきりと「神による準備が見える」のだという。

しかしながら、どうして彼女（たち）はこれほど沢山の仕事に、これほど沢山のエネルギーをもって仕えることができるのだろうか。「聖霊のわざが働いているから」、あるいは、「自分のために生きているのではないから」と説明することもできるかもしれないが、その本質を実感をもって見極めたいという思いと憧れが、今後も継続的に「神学的訓練を受けている女性たち」を研究していく動機になってくるだろう⁴¹。

持ち主だと考えられているため、インタビューではこの点についても質問した。

⁴¹ 一方で、「働く」というだけでは不足だということも分かってきた。彼女は、教団がフルタイムの職員を増やす組織改編を進めていることに触れたとき、「そうすると、教団での仕事は、ただの仕事になってしまう」と言って危機感をあらわにした。「働き」がビジネスライクになるとき、「そこには聖霊がない」と考えられるのである。

主要参考文献

- คณะศาสนศาสตร์แมคกิลวารี่, อนุสรณ์ ; ศาสนศาสตร์ศึกษา ๑๐๐ปี, 1990.
- ชวลีพรรณ ศรีสุนทร, ชีวิตและการทำพันธกิจของคริสตจักรท้องถิ่นในเขตชนบทภาคเหนือ สังกัดคริสตจักรภาคที่1 แห่งสภาคริสตจักรในประเทศไทย, มหาวิทยาลัยพายัพ, 2555.
- สุภาพร ญาญสาร, “การศึกษาความหมายของ “พาราเคลตอส” (องค์พระผู้ช่วย) ในกิตติคุณยอห์น,”
วิทยานิพนธ์ซึ่งเป็นส่วนหนึ่งในการทำปริญญาศาสนศาสตร์มหาบัณฑิต, คณะศาสนศาสตร์แมคกิลวารี่ มหาวิทยาลัยพายัพ, เชียงใหม่, 1989.
- หน่วยงานสตรี สภาคริสตจักรในประเทศไทย, ประวัติศาสตร์คริสเตียน : สภาคริสตจักรในประเทศไทย, 2014/2015.
- เอกสารการประชุม, คณะกรรมการดำเนินงานสตรีคริสเตียนสภาคริสตจักรฯ, ชุดวาระปี 2010-2014 และ ชุดวาระปี 2015-2018, สมัยสามัญ ครั้งที่ 1/2015, วันพฤหัสบดีที่ 22 มกราคม ค.ศ. 2015 ณ ห้องนมัสการ ชั้น3 อาคารสภาคริสตจักรฯ กรุงเทพฯ
- Arayaprteep, Kamol. 1987. “Christology,” *Asian Women Doing Theology : Report from Singapore Conference, November 20-29, 1987*, AWRC, 168-173.
- 1993. “Theologically Trained Women in Thailand,” in Association for Theological Education in South East Asia, (eds.,) *Workshop on Women in Theological Education : November 2-10, 1993*, ATESEA, 70-72.
- Boonprasat Lewis, Nantawan. 1985. “An Overview of the Role of Women in Asia : A Perspective and Challenge to Higher Education,” *East Asia Journal of Theology*, Vol. 3, No. 2, 139-146.
- 1986. “Asian Women Theology : A Historical and Theological Analysis,” *East Asia Journal of Theology*, Vol. 4, No. 2, 18-22.
- Vigilante, Marcus. 2007. *English-Thai Dictionary of Christian Terms and Bible Words : A Handy Bilingual Reference for Those Involved in Cross-cultural Ministry*, Payap University Press.